

編集後記

『戦史研究年報』第29号をお届けします。

巻頭言にある通り、2025年は先の大戦が終結してちょうど80年に当たります。そのため、本号は特別号として、様々な新機軸を採り入れて発刊しております。

最初に紹介するのは、戦史研究センターのOBでもある北海道大学の岩谷将先生の論文で、日中戦争の拡大に関し、戦局が泥沼化していく過程を明らかにしています。次に、先の大戦に関連して、戦史研究センターに所属する研究者3名の論考を収録しました。第一の齋藤論文は、戦後80年という節目に当たり、歴史研究の中でも一般に軽視されがちな作戦戦闘史の研究・学習の重要性を述べるものです。第二の藤井論文は、同じく、近年注目される日中戦争の研究史の整理を行い、新史料の公開や多面的かつ国際的視野を備えたアプローチからの研究増加による、同研究分野の将来性に言及しています。第三の松原論文は、旧日本軍における空軍独立問題を題材に、急速に発展する軍事技術の成果を発揮するため、軍事組織がいかに対応すべきかを論じています。

また、本号は戦後80年の特別企画として、各研究の権威ともいべき研究者5名による特別座談会を開催、先の大戦が世界史、特に現在に続く戦後世界秩序に与えた影響について、示唆に富む議論を記録しています。

最後に、例年、その年に招へいた海外研究者の発表成果を「研究会記録」として掲載していますが、本号は、世界的に有名な戦略家で、昨年、今年と戦史研究センターで講演を行ったエドワード・ルトワック氏からの寄稿文を掲載しています。氏は「中国は戦争できるのか？」と題し、主に2020年に中印国境ガルワン溪谷（ラダック）で生じた両国の衝突事件を取り上げ、中国軍の戦意をめぐる国内状況について詳細な分析を行っております。

他にも、「国際会議参加報告」として、ダカールで開催された第50回国際軍事史学会大会の概要、同大会において進藤主任研究官が発表した論稿（英文）を掲載、更に「活動報告」では、令和7年中に当センターが実施した諸活動を記載しました。

最後になりましたが、戦後80年を機に企画された本号発刊のためにご協力いただきました関係各位に厚く御礼を申し上げます。

(塚本 勝也)